

---

# 季節屋

保地葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

季節屋

### 【著者名】

ZZマーク

N7914D

### 【作者名】

保地葉

### 【あらすじ】

季節屋には月」としてさまざまな支店があり、その支店を訪れるさまざま人々のはなし。短編連作。

人間には三大欲求があるというが、確かに欲求が満たされないと何かしら障害が出る。

せめて性欲がないのであれば淡白つてだけで説明がついたのに。私には睡眠欲がない。それに伴つて食欲もない。

眠りたい、と思っても眠れたことがない。最後に寝たのはいつのことだか。そうだ、二ヶ月前だ。だいたい二ヶ月も寝ないとふとした瞬間に倒れて病院に運ばれる。そのまま丸三日意識不明で昏睡し、目覚めてみればまた不眠症だ。

初めて昏睡したときは無断欠席を心配した会社からの電話にも目覚めなかつたため、気にして訪ねてきてくれた同僚に玄関先に倒れていたところを発見された。気が付けば病院のベッドの上だ。医者には栄養失調の傾向ありと診断されたが不眠の原因はわからなかつた。ストレスではないかというのが大方の見方である。睡眠導入剤と各種栄養剤を処方されて退院した。

会社からは休養を勧められた。ちょうど抱えていた仕事が一段落ついたところだつたし、有給も溜まっていたこともあつて勧められるまま一週間ほど休暇を取つた。休暇中の一週間、私は眠らずに過ごした。

最初は睡眠導入剤が効かないんだと思った。同時に服用している栄養剤で目がさえているのだ。疲れれば眠くなるのではないか、とそう思い、近場のスポーツクラブの体験コースに申し込んでみた。そういえば会社に入つてから運動というものをしていない。学生時代は体育会のクラブだつたのだ。久しぶりの運動は体をリフレッシュさせた。そのスポーツクラブは取引相手の関連会社で、取引先の名前を出すと入会費と年会費を割り引いてくれた。この値段ならたまの運動にいいな、ということで入会して帰つて來た。

ところが三日通つても肉体的に疲れを感じるもののみの眠くはならな

い。カフェインがいけないのかもしれない、と大好きな珈琲も止めた。薬を処方してくれた病院へ行つてみた。自律神経がやられるのかかもしれない、仕事などで悩みはないですか、とカウンセリングを勧められた。

しかしおかしなことに眠らないことに不安感はないのだった。障害といえば食欲がないぐらいだ。休暇明け復帰した仕事でも特になんの変化もなかつた。生活自体も変わらず、変化といえば睡眠と食事の時間が減つたので、スポーツクラブへ通う時間と本を読む時間が増えたぐらいだ。それでも余る時間はレンタルビデオ屋で借りてきた映画で潰した。

そんな生活を送つた後、前回より約二ヶ月後、私は再び倒れた。今度は商談中に。同じように病院に運び込まれ三日昏睡、その後元気に退院した。そんなことが何度も続いた後、医者が匙を投げた。医者より対応が早かつたのは会社だつた。私は部署を外されはしなかつたものの外回り担当からは外された。つまり、知らないところで倒れられたら困るということだ。会社内でのサポートの内勤に回されてしまったのだ。元々じつとしているのが性に合わない私は直訴したが、直訴している最中に倒れたのでそれ以上は訴えられなかつた。飛ばされないだけましか。そう思つて内勤の仕事をしていった。

生活しているうちに不眠と睡眠のリズムが二ヶ月のサイクルであることが掴めてきた。私はそれを上司に報告し、元の仕事に復帰した。私の代わりに外回り担当となつていていた社員は喜んで内勤に戻つた。不眠の周期が終わるあたりは外回りをしない。取引先と合わない。どうせならその前後は休暇を取つたらどうか。そんなこんなで私は二ヶ月に一度の休暇と元の仕事を手に入れたのだった。休日出勤は増えたが。

食欲がないので食事を忘れることが多い。忘れないように、なるべく職場の人と一緒に食事に誘つてもうつようにした。だから職場の人とも仲が良い。

睡眠欲がないことの「メリット」が極端に少ないので私はその「ことすら忘れ始めていた。

結局、それが油断になつたのだろう。

私は「季節屋」という店に飛び込み営業をかけていた。

二日後、目覚めたとき私は病院にはいなかつた。

見知らぬ部屋の布団の上で寝ていたのだ。

飛び起きてあたりを見回せば、ござつぱりした和室に布団が一組

敷かれ、周りには私のスーツとかばんがきちんと置かれていた。

「起きられましたら呼び鈴を鳴らしてください」

書置きとともに鈴が置いてあつた。ここは一体どこなのだろう。荷物を確認したが何も取られてはいなかつた。とりあえず、呼び鈴

を鳴らしてみた。

ちりりりん。

涼しげな音があたりに響いた。しばらくして、廊下を擦る足音が近づいてきた。すつ、と音もなく開いたふすまの向こうには年この一十かそこらの和服姿の娘が立つていた。

「お目覚めですか」

ふすまを静かに閉めると娘は私の布団のそばに膝を折つた。

「三日もお眠りだったの少し心配をしてました」

「すみません。持病のようなもんなんです。つっかりしてました。

ところで、ここはどこなんでしょう」

「季節屋霞初月支店、というよりすやの奥の間です。あなたが突然お倒れになつたのでこちらにお運びしたんです」ということは、私は仕事中に倒れたのだ。これは会社に知られるあまり。この仕事に復帰する条件が外では倒れないということだったのだかい。

「あの、」

「『安心下さい』。お勤め先には連絡いたしておりません。こちらの部屋の時を早送りしましたから」

「早送り…？」

「ええ、外の時間は三分と経つてませんわ。眠りの病のかたは田覚めるまで待てばよい、ということでしたから」

娘は落ち着いた口調で離すが私にはなんのことだか理解できない。とりあえず、会社に電話をしなければ。

「電話なら、部屋の外でお願いしますね。その間に部屋の時間を戻しておきますから」

携帯電話を確認すると圏外だったので、とりあえず私は部屋の外に出た。

ふすま一枚向こうに出ただけなのに廊下は冷え切っていた。一月の空気は体に染みる。いつの間にか着替えさせられていた寝巻きだらう。浴衣は上着がないと寒い。とにかく、会社に一報を入れなければ。

「…もしもし、三枝ですけど」

「おう、三枝か。どうした。なにかトラブルか？」

「いえ、無断で休んでいることを謝りたいのですが」

「は？ なに言つてんだ。今日も普通に出社しだろ？ あ、直帰の連絡か？」

電話に出た内勤の先輩は一人で勝手に、直帰にしどくから、俺も今接客中でさ、と言つて電話を切つた。

なんだ、一体。

自動に待受状態に戻つた携帯電話の画面には、時計表示が動いている。

16:04。日付は三日前のものだった。

電波を受けて自動で変わるようになつてゐる携帯電話が狂うなんて考えられない。それでも念のためネットに繋いでみた。ニュースを流しているサイトの日付を確認する。同じ。

私は三日寝ていたわけではなかつたのか？

いつも二日間昏睡するのでそう言う周期なのだと思い込んでいたが、今回ばかりはと眠つてしまつただけなのだろうか。日付的には

そんな感じである。しかし、あの娘が「三田寝ていた」と言つたではないか。

私は騙されているのか？

「あら、電話はお済みですか？」

部屋から出てきた娘は小さな砂時計を両手に持つていた。

「着替えられて、店のほうにいらっしゃつていただけません？　店は廊下の突き当たりですから。ああ、浴衣と布団はそのままで結構ですわ」

娘はそう言つて田の前を横切つた。足袋が床をする音。

「……あの、私の服を着替えさせたのは、」

私は娘の背中に向かつて問ひ掛けた。呼び止めなければ、と思つたのだがそんなことしか思い浮かばなかつたのだ。言つてみて、そういえば、と思い当たる。こんな若い娘に着替えさせられたのならば恥ずかしい。

「ええ、もちろん兄ですわ。今は店に出ています。兄がここへ運び、差し出がましいとは思いましたが着替えさせました。眠りの病ならば着替えたほうが楽かと思つて」

そういえば、この店を訪れたときに店番をしていたのは若い男だつた。あの男の妹か。

「では、店においてくださいましね」

娘は床を滑るように去つていつた。私は身震いを一つして、部屋に戻つた。その身震いがなにのせいかは分からなかつたけれども。さて、どうしたものか。

すつかり着替えて布団の上にあぐらをかきながら、私は考え込んだ。

とりあえず、直帰の連絡は入れたことになつたし、元々今日はアポがないからこそその飛込みだ。時間だけはたつぱりある。スポーツクラブの常連になつたおかげで多少の体力はついた。何かあつても、自分ひとり逃げ切るくらいはできるだろ？

思い切つて付き合つてみるのもいいかもしない。暇つぶしだ。

荷物を持ってひんやりとした廊下を進む。娘の言つたとおり、突き当たりに木の引き戸があった。ここが「奥の間」だらう。隙間から暖かい空氣が漏れてきている。私は戸を開けた。

「……ああ、来たね」

木戸の向こうは畳になつてゐる。そこに男が座していた。丸い卓袱台の上には飲みかけの湯のみがひとつ。古い物書き用の机の上に手持ち金庫と算盤が載つてゐる。一段低くなつて、店だ。

「どうぞ、座つて」

そう言つて座布団を勧められた。

「……どうも、」

男は作務衣の上にビブを着込んでいた。火鉢の上で鉄瓶が湯気を立ててゐる。

「茶でもどう?」

「いえ、お構いなく……お世話になりっぱなしで」

「いいや、眠りの病じゃ しううがない。近頃じゃ こんな町中まで霞が降りてんだな。全く、霞の爺さんも遊びまくつてんな」

「はあ、」

「兄さん、眠れなくなつてからどうくらいい?」

なぜ、この男は私が不眠であることを知つてゐるのだろうか。しかも、霞とは?

「……一年、一年と少し」

「ああ、随分とほおつておいてもんだね。兄さんも少し身体に気をつけなさい」

男は鉄瓶から湯を注いだ急須を傾けた。湯飲みをもうひとつ取り出し私のほうに寄越した。

「あいにく茶受けがなくてね、」

茶を啜つて身体の芯から温まることが出来た。廊下よりは暖かい部屋も、店が十間といふこともあって底冷えする。

「それで、霞吐きはしたことあるの?」

「は?」

なんだそれは。

「吸い込んだ霞を吐かないと、眠りの病は治らんぞ」

「どうか、その、眠りの病つてなんなんですか、」

「ほう、そこから話をしないとならないのか。いいかい、兄さん、

眠りの病つてのはね……」

男は朗々と語り始めた。

その昔、仙人を志した男がいた。

男は仙人になるため、師となる仙人を捜す旅に出たがなかなか見つからない。もともとが人の噂を辿る旅であるから、簡単に見つかるはずもない。男は旅の間も自己流で仙人になる修行を積んだ。

仙人は霞を食い、千里を見通し万里を走り、永久の時を生きる。薬草を育て、不治の病も治し、人々を諭す。男はさまざま噂を訊きながらかすかな伝を辿つて行つた。

男は肉魚を断ち、穀を断つた。女を断ち、物欲を断つた。草を食み、野で眠つた。世俗と離れることで穏やかな心を手に入れたが、食と眠りを断つことは出来なかつた。

男は旅の果て、山の泉の辺で天地に祈つた。

祈り続けて幾年月。男の夢枕に仙人が立つた。

そんなんに仙になりたいか。

はい。なりとうござります。

何ゆえ仙を望むか。

仙は不死と訊きます。私は死にとうないのです。千里を見、万里を生きとうござります。

何ゆえ不死を望むか。

私は次の世を見とうござります。

ならば、お前の志を試そつ。

男は辺り一面の霞に目覚めた。その霞を吸い込んだとき、男は眠ることなく動くことが出来た。男は眠らず野を駆け山を越え世の端まで見に行つた。食を摂ることも忘れ世の中の隅々まで見渡そうとした。果てもない湖を見、天へも届く山へも登つた。

男は幾日も幾月も幾年も眠らずにいたために、時の数えを怠つてしまつた。自分がどれほどの時を生きたのかが分からなくなつてしまつたのだ。気付いたときから数えを始めたが、さて、すると時が遅々として進まない。

男は時を持て余すようになつてしまつた。  
野を駆け、世の端まで行くことにも飽き、じつと時が移り変わるのが見ていることにも飽いた。次の世を見たいと願つたが、なんとまあ、世の移り代わりの遅いことか。

人は食い、飲み、笑い、怒り、泣き、喜び、憂い、眠り……そんな些細なことをするのに忙しく、安穩とした世を動かそうとはついぞ思つていないのである。

あの船があと一里、南に向かつていたら誰も見つけたことのない島に辿り着いただろうに。あの娘が怪我人を見捨てさえしなければ地主の重税から開放されていたのに。

男は永い時を過ごすうちに世の移り代わりの分岐点のようなものを見る能够ができるようになつていた。  
至極つまらない話である。

眠りの病というのは、眠らなくなる病のことらしい。眠れなくなるのではなく眠らなくなる。眠らなくても生活にほとんど支障がない。精神的には活力もあるし活動時間が増えるから深刻にはなりにくい。だが、精神的には平氣でも肉体的にはそうはいかない。活動限界を迎えた身体は突然、眠りだす。

「活動限界は、人それぞれなんだけどね。兄さんは平均的なほうさ。

知つてゐる限り、五年間眠らない人がいたよ」

眠つて回復した身体が目覚めれば、また眠らなくなる。この眠つてゐる期間もさぞまだといふ。唐突に眠りだすことから「眠りの病」と名が付いた。

「でね、これの原因は霞なのさ」

眠りの病の原因は霞を吸い込んだことにある。「霞の爺さん」が霞を撒いて廻る役目だ。霞は休みなく湧き出るので定期的に撒いて廻る必要があるらしい。

「兄さんはその霞を吸つちまつたんだな」

霞は人気のないところで撒いていたが、霞撒きを一任されている「霞の爺さん」が町中で撒くことに興味を覚えたそうだ。

それで最近眠りの病が増えているといふ。全く、迷惑な話だ。

眠りの病を治すためには、吸い込んだ霞を体内から出さなくてはならない。それが「霞吐き」である。なんと、口から霞を嘔吐するという。嘔吐するためには専用の薬湯を飲む必要がある。薬湯の材料はとある草だ。

「それで、その草とはなんなのでしょう

「ある山の頂きにしか生えない、薬草の一種さ」

「その山とは、」

「古い言い伝えのある靈山の一つでね、素人には登れたもんじゃない。ああ、大丈夫、草は採取してくれる専門の職人がいる。ただし、馬鹿みたいに高額なんだわ」

額を訊いた私は驚いて湯飲みを取り落とすところだつた。私の年収にも相当するではないか。

「ははあん、ここはそう言う店なのか？」

「兄さん、これが靈感商法の類だとか疑つてるね」

「当たり前である。」

「まあ、無理もないけど。そのままでも、眠りの病のままで生き死には問題ないよ。医者に行つても原因は分からぬ。心因性だとか、栄養失調ぐらいは言われるだろうがね。ただし、人は年をと

るにつれて体力が落ちる。眠りだす回数は増えるよ

そんなことを言われても、一年分の稼ぎをそんなわけもわからない草につぎ込む気はない。

「だからね、兄さん。頼まれてくれないか。俺の仕事を手伝ってくれたら報酬として草をあげよう。つまり、副業を」

男が仙人になりたいと志したのは、世の想像し尽くせぬ思いもかけない転換を目にする為であった。であるのに、今や物事は男の想像の範疇でしか動こうとしない。

男は語り合える友を亡くし、親類も身近な者は既に亡かつた。夢枕に仙人が立つたころから食欲を忘れ、睡眠を忘れていた。その為、肉も果実も草も口にすることができず、目を閉じても眠ることができなかつた。

仙になろうと心穏やかに祈つていたときが懐かしいほどに、男は苛立つていた。

男は自分の夢枕に立つた仙人に会おうと思い、幾日も幾月も幾年も噂を頼りに探し回つた。

男が死のない旅に憔悴しきつた頃、あの夢枕の仙人がふいに現れた。

仙になりたいと願つたのではなかつたのか。  
なりとうと思いました。

ならば何故にわしを探すのだ。お前は千里を見通し万里を走り、永久の時を生きることができる。薬草を育て、病に苦しむ人を治すこともできるだろう。

私は、もう、仙ではないとうないのです。  
何故、

私は千里の果ても万里の涯も見申した。しかし、もうどうしても

心穏やかではいられないのです。食したいのに食せず、眠りたいのに眠れず、見たくないものだけ見えてしまうのです。

次の世が見たいのではなかつたか、

はい、次の世が見たいと、そう確かに願いました。けれど次の世は一向に訪れませぬ。私が見るのは日々連なつた一日のみ。しかし私はその一日に入ることはできないのです。人々の一日は眠りで終わるのに私の一日は終わることがありません。人々は食することで育つていくのに私は何も変わりませぬ。

では、仙から人へ戻りたいというのか。できることなら、戻りとうございます。人へ戻ることはできぬ。

……は、

仙と人は似て非なるもの。人が仙になつたとき、既に人としての肉体も全て失つてゐるのだ。

では、私は続にこのまま、死することはできる。死して人でもなく仙でもないものになるのだ。

……死するか、このまま心穏やかでないまま生き続けるか、といふわけなのですね。

さよう。さあ、選べ。続か、終か。

男は考えた。考えに考え、人には永に思える時あと、答えた。私は、死にとうござります。

わかつた。

仙人は男の頭に掌を乗せた。すると男はみるみるうちに崩れ、土けらとなつた。初めは男の体ほどだった土けらは、むくむくと増え始め、とうとう頂は天にも届くほど山になつた。

仙人は急な斜面を軽々と登り、天にも届く頂の上で男に話しかけた。

仙を志し、飽いた男よ。お前の望みを叶える為に湧き出した霞は、お前が仙に飽いた為に塞がることはない。何事にも望めば報いがあ

る。霞は永く漂い続け、たなびくだろう。霞を吸い込んだものは、眠らず、食さず、しかし永遠には生きはしない。男よ、お前の山に薬草を預けよう。お前の霞を知らず吸い込んでしまったものの為に。仙人は懐から布袋を取り出し、土に埋めた。竹筒の水をぼたぼたと布袋のある辺りへかけた。

男よ、草を探すものがこの山を訪れる。次の世が知りたければ、そのものたちに訊くがいい。

男はこうして、願い通り次の世を待つことになった。

男の言つた「副業」とは、人搜しだった。

いや、人「搜し」だけではない。探し出し、取り押さえ、縛つてでも連れて来る、という誘拐まがいなものである。

「それは犯罪では？」

私の問いに、男は、

「犯罪まがい、と言つて欲しいね」

と言つた。何が違うというのだ。

「そもそも、契約を破つたのはあつちなのさ。霞撒きを依頼したとき、町中で撒かないのが条件だった。霞草を探りにいく手配もあるし、山にも機嫌つてのがある。なのに霞の爺さんときたら場所も考えずに撒きやがつて……」

男は煙草の煙を吐きつつ悪態を衝いた。今時珍しい刻み煙草である。長いパイプの先を火鉢で炙るとなんとも言えない薰りが立つ。外国製の煙草か、香、いや薬草やらそんなものに似た薰りだ。ドクダミの葉を石で叩いて汁を出す遊びを思い出す。

「それで、霞の爺さん、という方はどういう人間なのです？」

「言葉通り、霞を撒く爺さ。人間か、と言われば、ふむ、人間と

はいかなる基準をもつて人間とするかによるな。……兄さん、俺が人間に見えるかね、」

す、と前髪を搔き上げた男が見つめるので、私は柄にも無く心臓が脈打つを感じた。なんだそれは。相手は男いや、今考えるべくはそれではなく。

人間か、と問われれば人間にしか見えない。犬や猫、猿とは明らかに違つていたし、なにより私とこうして向かい合つて会話をしているのだ。

人間に見える、むしろ人間にしか見えない。そう答えると男は、「ならば霞の爺さんは人間つてことになる」

と言つ。私が訊きたかったのは人間かどうか、ではなくどのようないが、つまり、

「背格好や歳、できれば特長を知りたいのです、」

「ああ、そういう。背、は兄さんの胸の辺り、格好はそうだな、いつも小奇麗にしている。衣装持ちだから何を着ているかというのには答えられないな。歳は、ええと、こちらの見た目で言うと、七十九くらいだ。そうそう髪は白髪。一番の特徴は、霞甕を持つてゐる」

「……霞甕？」

「霞を入れておく甕や。一斤くらいの、両の手の平に乗つてしまつくらいの小さな甕だが」

霞の爺さん、の特徴はどうやらその甕だけらしい。外觀の特徴はどこにでもいる老人のようである。

そんな人物を私は捜し出せるのだろうか。

「まあ、仕事のついでにでも捜してくれればそれでいいさ。俺は急いではないのでね。時はたつぱりある。兄さんが暇なときでも、ちよつくら捜しておくれ」

男はそう言つて煙草を吸い込んだ。薬草の薰りが店中を満たした。

バンで廻っている移動式屋台の弁当を買つた。あつあつの味噌汁を付けてくれた。雪はちらほらと残つてゐるが天氣は良い。誰もいない公園のベンチで食べることにした。

食欲はなくとも、皿そうな匂いには弱い。それが体を温めてくれるものならなおさらだつた。一月のこの時期、外回りは体が冷える。発泡スチロールのカップの味噌汁は具が細かく切られていてスープのようにならぬことが出来る。ぶる、とひとつ震えると体の中から温かい息が出た。ほ。煮込みハンバーグも旨い。添えてある温野菜が嬉しかつた。

一人もくもくと食べていると、隣のベンチに老人が座つてゐることに気付いた。スーツを着た身奇麗な白髪の小柄な老人だ。にこにこと微笑みながら足元にじやれ付く猫を見ている。

……あとは籠を持っていれば完璧だな。老人の風貌はあの店の男が言つていたものそのものである。つまり、どこにでもいそうな老人だ。そんなことを考えていたら箸からハンバーグが転げ落ちた。機敏に反応した猫が飛びつく。それを追つてこちらを見た老人と目が合つた。

どうも、と軽く会釈をする。見知らぬ老人だが目が合つてしまつた以上、会釈ぐらいはしたほうがいい。そう思つただけなのだが老人はにこにことこちらのベンチに移つて來た。

「まだまだ寒い日が続きますねえ」

老人は話し掛けてきた。

「はあ、」

寒いならばコートでも着ればいいじゃないか。そんな言葉を飲み込んだ私は生返事をしてしまつ。日常スポーツクラブで体を鍛えている私ですら、厚手のコートを着てゐる。それなのにこの老人はスーツだけだつた。

「こんな町中でもね、底冷えはしますね。ビルの谷間とか風が冷たくて。すると山なんか頬が凍つてしまいそうになるほど寒いんです

よねえ

「山のほうからいらっしゃったんですか？」

「ええ、山のほうで仕事をしてるんです。いつもはね。でもこんなに冷えるとどうしても町が恋しくなってしまってね」

と、老人はどこから取り出したのか魔法瓶の番茶を啜り始めた。私も味噌汁を啜る。ハンバーグを喰い終えた猫がスラックスを引っ搔いた。

「おいおい、これはおまえのこはんじゃないぞ」

「おじいさんの猫ですか？」

「いえいえ、ただの顔見知りです」

老人が猫を抱き上げる。猫はおとなしく膝に乗つた。

「仕事が終わらないと収入がないので同居人は歓迎出来なくてね」

「お好きですか、猫」

「ええ、ええ。山にはこんな懐こいのはいなくてね。ついつい降りてきてしまった」

連れ合いにでも先立たれ、一人暮らしの老人なのだろうか。顎を撫でられた猫が喉を鳴らす。随分慣れているようだ。

「お兄さんはお仕事ですか」

「ええ。外回りの途中です」

「そうですか、そうですか」

老人はにこにこしながら番茶を啜る。

季節屋には外回りの合間に訪れるようにしている。眠れない病はまだ続いていた上、よく分からぬ依頼、いや交換条件だが交わした約束を破ることは私の仁義に反する。

と、理由をつけてはいたものの、実のところ私の興味は季節屋に置いている商品にある。一見道具屋かと思ったが、設えられている古びた箪笥や机、長椅子やらは陳列棚の代わりであり、その上に乗っている雑多なものがこの店の売り物なのだ。雑多というのはその売り物がコルク栓の付いた硝子瓶、アルミの水筒、皮の布袋に一枚貝を合わせ紐で結んだもの、小甕大甕などと統一感がないからで

ある。いや、一貫した共通点はある。それはそれらが全て何かを入れる容器物である点だ。

箪笥の中には布の端切れが乱雑に入れられており、小引き出しには短冊のような細長い紙切れがたくさん入っていた。引き出しは時折整頓されるが、またすぐに乱雑になる。私はいつか季節屋の主人が引き出しを搔き回しているのを目撃した。となれば、整頓しているのはあの二十ほどの娘なのだろう。

「兄さん、その後調子はどうだね」

男は私が訪れるときは決まって刻み煙草をふかしていた。最初は店を出てからも服についた薬草のような薰りが気になつたが、今はそうでもない。しかし煙草のお陰で店が煙く感じじる。この店には換気扇がない。換気をしなくてよいのかと訊ねれば、

「この店はいい歳だから、俺がしなくても自分で呼吸するだらうよ」という。なるほど、柱や入り口の戸の合わせからは外が細く見え、隙間風が自然に換気をしてくれているようだった。

私の興味をひいたこの店の商品たちは、容器物ではあるがその内に何も入れてはいなかつた。硝子瓶の向こう側はよく透けて見え、甕を持ち上げても何かが入つていて風ではない。蓋を開けて中を見て見たかつたが、どの商品も口に当たる部分に和紙で封がしてあるのだ。

私はそのうちの一つを、購うつもりで値段を訊いた。三角錐の硝子瓶がいたく気に入つたのだ。

しかし男は売約済みだ、と一蹴した。

「兄さんはそれを購うよりも先に霞の爺さんを見つけてくれないと。霞吐きをしないと眠りの病は治らんよ。この寒空、外で眠つてしまつたらそれこそずうつと眠り続けるはめになる」

確かに、時期は一月の下旬に差し掛かり、初春とは名ばかりの冷え込みになつていていた。これでは鶯は鳴くまい。鳴こつと思つても留まる梅が咲いていない。

地面に弁当を置くと、老人の膝から勇んで飛び降りた猫が食い始

めた。残っていたのは五分の一ほどだったが、猫の体には十分だったようだ。満足した、とひと鳴きし、私の脚に顔を摺り寄せてきた。

「懐かれましたね」

「食べ物にね。それだけですよ」

「いやいや、お兄さんは良いお人のようだ」

「ここにこと小柄な老人は言った。

「お兄さんは見たところ体格もいいし顔色もいいけれど、悩みなどはないのかね？」

「は？」

唐突に何を言うのだ。

「猫のご飯の御礼に、少しでもお力になればと思つてね。お兄さん、一日の時間は足りているかね？」

「……十分です」

「しかし急いではいけないのでしょうか？」

「確かに、俺は急いではいない。時はたつぷりあるが、一月ももう幾日かだ。兄さんは急いだほうがいい。一月が終わったら次の二月まで十一ヶ月も待たなくてはならないだらう」

「なんという奇妙な事を言うのだらう。私は思つたが口には出さなかつた。この男の言うことはこれから奇妙だつた。

「兄さん、お客様もお茶を如何ですか」

奥の木戸を開けて入ってきたのはこの男の妹だつた。あちらで用意してくれたらしい茶器を卓袱台の脇に置く。厚手の皮手袋を履き鉄瓶から湯を注いだ。柑橘系の香りが立つ。

「柚子湯ですわ」

差し出された湯飲みを遠慮なく受取り、ふつふつ冷まし冷まし啜る。蜂蜜の甘さが広がる。

「風邪のひきはじめにも宜しいんですよ」

「宜いです」

につこりと笑う娘に、私は俯きがちになる。気付かれないよう湯飲みを啜り、舌を焼いた。

私が季節屋に通う理由は、この娘にもあるらしかった。

隣で猫が鳴き、はつと我に返つた。弁当は既に冷たくなつていて、思いかけず長く考え方をしていたらしい。味噌汁はよく冷えていて、一口啜つた私はぶるりと身震いした。

「まあまあ、お兄さん、お茶をどうぞ」

隣の老人が魔法瓶を差し出してきた。私はどうしようかと迷つたが、冷たい味噌汁を飲むと空いた発泡スチロールのカップにお茶を注いでもらつた。口を付け、それから思い出してコートを襟元まで留めた。

「おまえ、冷えてしまつたがやるよ」

嘘ではない。むしろ有り余るくらいの時間がある。

「しかし、時間が有れば、と思つときもあるだらつへ、眠つている時間が勿体無いと思う時が」

「はあ……」

私は訳が分からず生返事をした。この老人は何が言いたいのだろう。何を礼としてくれるというのだろう。

「そう、そう。 そうだろう、そうだろう。人は時間が足りないだろう。人の世を見るには余にも時間がなさ過ぎる」

老人は「ごそごそ」とスースーの内ポケットを探つている。

「お兄さんには、ちいとばかし時間をあげよう。お兄さんは若いから、よくよく体が動くよ。ちいとばかし不都合もあるけれども」老人が取り出したのは小さな甕だった。どうしてこんなものが内ポケットに入つていたのかが不思議だが、両の手の平に納まるほど

の甕である。

あ、と思った時にはもう遅く、老人は甕の蓋を取つた。

「 爺さん、やつてくれたねえ」  
「 ずっと茶を啜つたのは老人だつた。座布団にきちと正座し、  
膝にはあの小甕を乗せてゐる。

「 契約違反だよ。話が違う。おかげでこんな町中に店を構えるはめ  
になつた」

「 町はいいじやないか。人も多いし、なにより猫が沢山いる  
「 町中じやあ商売にならないんだよ」

「 しかし、この兄さんが来ただろ」

「 こいつは偶々だ。いいかい爺さん、町じや眠りの病の奴はみいん  
な医者に行つちまうんだ。実際この兄さんも霞吐きのことなんざ知  
りもしなかつたし、眠れないことすら特段不便に思つちやいない。  
俺らのような商売はちょっとくら寂れた町が丁度いいってのに」

「 霞は霞に惹かれる。構えておればいつか客は来る  
と、老人はにこにこと茶を啜る。

「 いつかってなあ、」

剣呑さが増し始めた、一方的に男の側だけだが、その空気を換えたのは男の妹だった。

「 あらあら兄さん、無事にお戻りなのですからもういいでしょ。  
爺さま、兄も爺さまと連絡が取れずに随分心配してましたのよ」  
男が刻み煙草をパイプに入れ、火鉢から火をとつた。細く煙がたなびいて行く。

「 それにもお兄さんがわしを捕まえて来るよう契約していたと  
はねえ。そうと知つていたら甕なんぞ出しませんよ」

老人の空けた小甕からはさあつと白い湯気のような霞が湧き出、  
私を囲んだのだが、私は吸い込むことなく、霞は甕に戻つて行つた  
のだ。

「 こりやしまつた、」

そう呟いて老人は背を向き逃げようとしたが、動きはこちらのほうが速かつた。胸のあたりにあるスーツの襟を捕まえ、胴に腕を廻して捕らえる。

霞の爺さんですね、というと観念したのか力を抜き、季節屋へ連れて行くように言った。

「お兄さんの前で霞を撒いた覚えはなかつたんですね」「私にも覚えがない。老人とは今日が初対面だと思う。

「この兄さんが霞を吸つたのは一年よりも前だ。爺さんちよくちよく降りてきて、そこかしこで霞を撒いてただろ」「

「ああ、一年となると家内が……」

亡くなつたのだろうか。言葉尻を濁す老人に同情の目を向けると、男がわざわざこちらにむかつて煙を吐き出した。

「先立つてはいないよ、愛想を尽かしただけさ。それを反省して搜しに出たものの、あちらこちらに霞を撒くから困つた同業者がふん縛つて俺のところに送つてきたのよ」

「縛つて、」

「いへ、ぐるぐる巻きにですね」

老人が身振りで示した。

「婆さんが会いたくないってんだから仕様がないだろう。見つけられるはずもないのにうろつかれて、霞だけ撒かれるのが嫌だつたのさ」

「あやつの店は生真面目ですからねえ」

全容が掴めず、自分がこの場にいても良いのか、疑問に思つた。手持ち無沙汰を「」まかすためにただ茶を啜る。

「……柚子湯、皿かつたな」

「あり、ありがとうござります。褒めて頂き嬉しいですわ」「いつかの茶を思い出し、ぽつりと呟いた言葉を聞かれていた。頬が紅潮したことが分かる。娘は微笑みながら、私の空になつた湯飲みを満たした。

「きつちり契約さえ守ってくれれば、婆さんに会わせてやれたのに

「いやいや、久方ぶりに町へ出るとですね、こう、つきつきしてくるのですよ。心が湧き立つというのかね。すると人に会いたくなってしまって 人がいるほうへ、いるほうへと下りてきてしまった」

「よく言つよ。契約を守る気なんぞなかつたのだろうよ、」

「それを分かつていて契約された兄さんも兄さんですわ、ねえ」

そう思いません、どちらに話を振られ、私は返事を曖昧に濁した。ふう、と煙を吐いた男はパイプに残つた刻み葉を火鉢に捨てた。ぱちぱちと葉が燃え、一層薬草臭くなる。

「まあいいや。これで兄さんとの契約が成立したし」

ぶすっとした表情で言われ、この男は契約が成立しなければよかつたのかと不審に思う。

「ああ、爺さんのおかげで稼ぎがゼロだ。結局この兄さんしか客が来なかつた」

「悪巧みをするからです。真つ当な商売をすればいいのに」娘がくすくす笑いながら、ごめんなさいね、と両手を合わせて私を見た。大人びた言葉づかいをする娘の歳相応、いや、正確な歳は分からぬから外見に相応な行為が可愛らしい。

しかし、より何がなんだか分からなくなつた。

「ほら、兄さん、謝りなさいな。この方のおかげで大事になる前に事が済んだのですから」

娘が促し、男が渋々、居住いを正す。膝頭を並べ正座され、指先を付いて上体を深く下げた。私に向かつて。

「すまなかつた、」

そしてゆつくりと頭を上げ、唇の端に笑みを浮かべながら付け加えた。

「しかし、助かつた」

私はさつぱり理解できず、ぽかん、という顔をしていたのだろう。娘のくすくす笑いが大きくなり、袖で口元を抑えるどころかくるりと後ろを向いてしまつた。男は胡座に戻り、何事もなかつたかのよ

うに空のパイプを咥えた。

「おまえさん、それではお兄さんを混乱させるだけさね。順を追つて説明してやらな、」

「事の発端が何を偉そうに、」

「あら、そもそも始まりは兄さんじゃありませんか」

老人、男、娘が訳知りの会話を交わす。

「俺は謝ったじゃないか、」

「ではきちんと説明もしてあげて下さいな。ねえ？」

唐突に振られ、条件反射で頷いた。あ、と思ったが考えてみれば私にとつてもこの男が事の発端なのだ。契約も交わしたし、成立もした。説明を受けるのは当然だ。

男は口を歪め渋つていたが、旗色の悪いのを見てとり、溜息を付いた。

どうやら観念したらしい。

男は湯飲みに手を伸ばし、唇を湿らせる。そして、

「兄さん、怒らないと約束してくれるかい？」

私にしつかり念を押すと、よつやく話し始めた。

眠りの病に効く薬草、霞草はとても高額である、というのがそもそもの原因だと男は言った。

「高額じゃなければ俺だってこんなことは思いつかないし、考えもしなかつたろう。霞草があんな靈山にしか生えず、専門の職人しか採取できず、しかも流通量が少ない。それがそもそもの原因なんだ」

男と老人が出会ったのは男が店を構えてからある程度の年月が経つた頃だった。ある程度の年月が経つていたが、店には全くといっていいほど客が来ない。従業員も雇い入れたいのに客が来ないから

金がない。商品を購い入れようにも元手がない。妹に手伝いを頼むのがやつとであり、仕入れに行つてもらう旅費も無い状況だつた。

そこに霞の爺さんが送られてきた。送られてきた、というのは老人の所業に困り果てた同業者がふん縛り、言葉通り送つてよこしたのだといつ。

「爺さんは元々、この店の持ち主でね。古巣ならどうにか出来るだろうと読んだらしい。全く、いい迷惑だよ」

「ええ、それで兄さんは悪巧みをしたんですね」

霞の爺さんの持つている霞甕の話は有名であり、男も聞き及んでいた。男は考えた。

つまり、霞をわざと吸い、霞吐きの霞を封詰して商品にしよつ。男の提案に老人は取引を持ちかけた。霞甕は定期的に蓋を開けて霞を巻かなければならない。この縛りを解き、自由の身をくれたならば霞を吸わせてやろう。ついでに霞草を格安で卸してくれる仕入れ屋を仲介してやろう。

老人は離れて暮らしている妻を追つて町にちょくちょく降りていった際、あまりにも霞をむやみやたらに撒くものだから、身を寄せていた遠縁にあたる者が困り果て、男の同業者にあたる人物に相談したのだと言う。家族親類が眠りの病になつてしまい、霞草を買つために大枚をはたくはめになつた。その話を聞いていた男は、自由の身にしてやつてもいいが、条件を付けた。

霞は、人の少ない町で撒くこと。ちょっと寂れた、伝承が残つているような里がいい。眠りの病になつたものたちは噂を伝い、この店にやつてくる。そこで男は霞草を売る。

つまり、霞を吸つたものたちが客として訪れればまた売上になる。どちらに転んでもよい契約である。

「契約の条件は俺が噂を流した町で撒く、つてことだつたのに、この爺さん、全く噂のない町中で撒きやがつた。お陰で客なんぞさつぱりきやしない。兄さん以外は、」

なんのことはない。私を助けてくれようとした男は、私を鴨にし

ようとしていたのである。

「しかも、町中で撒いていたことがばれまして、先日、爺さまをこちらに連れていらした方が見えたんです。爺さまを捕まえない限り、靈草を一切うちに卸させない、と仰いまして、それで兄さん慌てて爺さまを捜してんんですけど、」

娘の言葉ににこにと話を聞いていた老人が動きを止めた。

「なんだ、あいつにばれたのか」

「こんだけ派手に撒いてばれんものか。そうそう、うちにには預けておけんから爺さんを引き取りに来ると言つてた、」

「なに、おまえさん、それを承知したんか」

「俺に逆らえると思うのか、」

老人はさあつと顔色を変えると、慌ただしく身支度を整え、立ち上がつた。

「わしは行く。あいつには宣しく言つておいてくれ」

そして急いで靴を履き、店を出るのとする背中に、娘が声を掛けた。

「宣しく、は本人に言つのがいいと思いますわ。先ほどからすうつと、お待ちだもの」

老人の表情の無い顔が振り向いた。

「……来どるのか、」

「はい、奥の間に」

娘はにこにこと笑いながら、次の間に続く木戸を指した。老人にはつきりとした諦めが浮かび、項垂ながら靴を脱ぎ、揃え、再び座した。

「今度ばかりは觀念するんだね」

男が言い、にやりと笑つた。

「兄さんは偉そうなこと、言えませんでしょ？」

娘が奢める。そして私の方を見、言つた。

「」迷惑をおかけして、申し訳ありません。わたくしも兄も店を離れることが出来ないのですから、あなたさまにご面倒なことをお

頼みいたしました。おかげさまで爺さまも無事に戻り、安堵いたしました」

三つ指を付き、優雅に腰を折る娘に鼓動が高鳴った。頭を下げたときには着物の襟足から覗くうなじと、ほつれた後れ毛に目が行く。いけない、今はそういう目をする場でなく

思わず泳いだ先に男と目が合い、目元だけで笑われた。すぐ逸らし、こまかすために咳払いを一つ、する。

「頭を上げて下さい。私も自分の身のことで契約をしたまでですし、

」

そう言うと娘は顔をあげ、微笑んだ。

「そう仰つて頂けますと、心が楽になりますわ」  
につこり、と擬態語が見えそうな笑みを向けられ、私は、ええ、とか、まあ、とか口の中でもごもこと返事をする。

「さてね、兄さん。約束の霞草なのだけどね」

助け船になつたのは男だつた。悪いね、と小声で付け加えるのも忘れていない。

悪くは無い。むしろ助かつた。

ここ二年の欲求不満というのか、睡眠欲と食欲が減退している代わりというのか、言いたくはないが、反比例するように、言つておくがあくまでゆるやかに、性欲というのが私の中で勝つていて。女に対する鼓動というのが、左胸から頭を巡り、体の隅々へとつまり、下半身へと直結しそうになり、私は理性で抑えた。男が口を挟まなければ、そんな堰など崩壊してしまつたかもしがれない。犯罪じみたことになる気は無いが、少なくとも娘には軽蔑されただろう程度には事が起きたに違いない。

その意識が男に戻され、私は実際安堵の息を吐いていた。

「ええ、契約が成立したのだから頂けますよね」

「ああ、もちろん。しかしだね、頼み事があるんだ」

「またですか」

「いやいや今回は兄さんにとっても悪い話じゃないよ

以前にも同じ台詞を聞いたよつな。

「して、何を」

「いやなに、霞吐きをするだろ？ 兄さんは知らないだろ？ が、薬湯を飲むと体中の吸い込んだ霞が出てくるんだ。それをもらえないかと思つてね、」

「私の霞を？」

「そう」

何故そんなものを欲しがるのだろ？

「この店はね、兄さん、元々霞を売る店なのさ。そこいらの容れ物には皆、霞が入つてゐる。密は氣に入りの霞の入つてゐる容れ物、または霞で染めた端布れやらを購う。眠りの病の霞はね、一旦人の体に入らなきや売り物に出来ないのでね、」

「それも兄さんの悪巧みの内でしたわね。霞草を求めて来たお密さまの霞を売る、といつ」

「なかなかに商売上手だろ？ 商品を売つて同時に商品を仕入れる、なんてそつそつに出来たものじやないよ」

「ですから兄さんには偉く出る資格はない」と言つてはいるのに、霞を売る店。あの雑多な「容れ物」たちは空ではなく、霞が入つてゐるというのか。

「では、あの霞たちはどこのから手に入れたのです、」

密も来ず、元手がないと言つてはいるのに。

「あああれか。あれは、」

「兄のですわ」

男の代わりに娘が答えた。

「え？」

「あの霞たちは兄のですわ。商品を仕入れる元手が無いもので、兄が爺さまの霞を吸つて態と眠りの病になり、霞吐きをしてそれを詰めてはいるんです。あの方が怒るのも無理はないわ。商売にするために霞の爺さまをうちに寄越したのではないですもの」

男は霞甕の霞を懶々吸い、霞草を少量ずつ使って上手く霞を吐き

続けたらしい。男が銜えていたパイプに入っていた薬草臭い刻み煙草は、薬草だつた。湯にして飲むよりも効果が薄く、眠りの病を治すことなく霞吐きが出来るといつ。

「その上、ちつとも売れませんの」

「この前ひとつたつ、売れただる」

「ひとつふたつじや、霞草のほうが高くつきますわ。眠りの霞は濃いほうが購い手がつきますのに、あんな薄いものじや、」

「……つてことで兄さん、兄さんの吐いた霞を頂けないかね。なあに、吐き出した霞は本来霧散して消えてしまうものなのだ。霞を売る事が出来るのは霞初屋、うちくらいだる。ちょっとくれればいいんだ、」

と、男は刻み煙草の入った丸缶を出した。卵がひとつ入るかは入らないかの大きさであり、易々と手の平に乗つてしまつ。

「これ程でなかなかの金額だ。希少品だよ。兄さんが霞吐きするには半分ほど薬湯にする必要がある。さて、どうする」

「どうすると言つたつて……あなたはそんな高価なものを吸つていたのですか」

「この男の煙草が薬臭い理由が分かつた。薬草そのものだつたのだ。「ほんの少量、微々たるものだよ。これを吸わなきや商品も並ばないだろ」

「それに兄さんは体力が無いから、すぐにひとつたつふたつは寝込んでしまいますから、商いも出来ませんし、」

「商いに支障は來たしてないだろ。おまえもぐずぐず言つものじやない、」

男は娘に睨みをきかせ、すぐに私に向き直る。

「で、どうする、」

「どうするもこうするも。私には年収にも匹敵する、男の誇大かもしれないがおそらくそれほどの値はつくのだろう訳のわからない草に、払う金はない。ただでくれるというならば貰いたい。そもそも吐いた霞など私には使いようがないのだ。貰つてくれるというなら

ば貰つて頂こう。それでこの店が助かるといつのならば 助けとなるのならば、願つたりだらう。

「…………いいでしょ。霞は差し上げます」

「そりゃ、そりゃ助かるよ」

男はあからさまにこいつと、霞草を摘み懐紙に包んだ。娘に渡し、

「じゃあこいつで薬湯を、」

「はい、少々お待ちくださいましね」

娘は懐紙を持って去り、男三人が店に残された。しゅんしゅんと鉄瓶が沸き、蓋が時折跳ねる。しばし誰も口を開かず沈黙が続き、したところで老人が言った。

「霞というものはですね、霞に惹かれるのですよ」

え、と私は小さく返答をする。誰に語りかけているのか分からず、とりあえず老人を見やる。老人は小さな靈籠を撫でながら誰を見るわけではなく話していた。

「人のね、欲求というものは果てしないものです。ここまででよい、とこう制限も限界もありやしません。見たいも知りたいも、聞きたいも何でも次から次へと沸いて出るもんです。それは誰にも止められはしませんし、欲を持ったことを誰にも責められる筋合いはございません、」

自分はもつと上に行けるのではないか。もつと多くを知り、多くの人と会い、もつと仕事も趣味も何もかもが出来るのではないか。それには何よりも、時間が足りない。

「霞というのはね、そういう欲を薄めたりするもんなんです。薄うく薄うく、すると心がぐんと楽になる。籠の辺りを彷徨つていた心が一気に頂きに昇る。深呼吸して周りを見て見れば、何てことはない、この世は霞で出来ていてことに気付く。欲というものは叶うと散つてしまふでしょう。霞は欲を薄めて霧散させちまう。霞というものはね、本来そんなものなんですよ」

時間が欲しいと思い、それを手に入れた。困ったといつよりも嬉

しことが勝つた。やれる事が広がり、ますます行動的になる。

しかし、私は上には行けなかつた。

いや、行かなかつたのかもしれない。

「だけどね、霞でいっぱいになつちまうといけない。ほんやりして少くなつちまう。知りたいことも見たいこともなくなり、至極つまらなくなつちまう。そこではつと気付く。短い時間でね、知ることの出来ないことも見ることも出来ないことがあるつてことがなんて楽しいか。

だからね、霞なんてのは容れ物に入れて、ちょっと飾つておぐらいが丁度いい。布切れや紙切れに染めて栄にするくらいで丁度いいんですよ」

老人は霞甕の蓋を開け、ゆっくりと霞が立ち昇る。店を一周した霞は甕に戻つた。

「まあお兄さんもこの世を愉しみなさい。限りある一生といつものはなかなかに良いものらしいですよ」

確かにそうなのかもしれない、と私は思った。やりたくて仕様がないあの焦燥感の、したくて仕様のないあの切望感の、何とも言いたい感覚。最近それを感じたのはいつのことだつたか。年の瀬の押し迫つた充実感はなく、常に正月休みのようなするべきことが薄れる日々。私が好きだつたのは師走の慌ただしさだ。

「ええ、そうなのでしょうね」

「霞吸わせた張本人が説教する話じゃないな、」

「仕様があるまい。霞は時折撒かねばならないんだからな」

霞甕を懷にしまい、老人は悪びれた様子も無く言い放つ。そこで木戸が開き、盆を掲げた娘が入つてきた。後ろに背の低い男がひとり。

「薬湯が入りましたわ」

「どうぞ、と盆」と前に据えられる。湯飲みがふたつ載つており、ひとつからは甘やかな柚子の香りが漂つていて、「お口直しに柚子湯をどうぞ」

娘が笑み、勧められるままにもうひとつ湯飲みを手に取る。

「爺さんは連れて行くぞ。いいな、」

「ああ、面倒をかけてすまないな」

「全くだ。この季節は寒くて得意じゃないんだよ。お前に頼んだのが間違いだった。おい、行くぞ」

背の低い男が店主の男に言い、老人が渋々立ち上がった。

「ああ、優しくしてくれよ。年寄りは劳わるもんだよ」

「何が年寄りだ。劳わられたかつたら大人しくしておけ」

背の低い男が老人の襟首を掴み、木戸を開けた。半ば引きずるよう連れられ、

「お邪魔さまだったね、」

「ええ、爺さまもお元気で」

「今度は言い付けを守れよ」

「さあ行くぞ。ここは寒くてたまらん」

「行くよ、行くよ。引っ張らんでもついて行くぞ。お兄さんもお元気で。ああ、気が向いたら出い、あの公園の猫に餌をやつしてくれませんか。週に一度、いや月に一、二度でいい。甘やかすのもよくないから」

別れの挨拶をされたが、私はろくに返事が出来なかつた。勧められるままに干した薬湯のせいか、猛烈な吐き気が私を襲つていた。

一月に入ると冷え込みも厳しくなり、足場も悪く外回りには向かない。泥水が跳ねた靴を拭い、コートの襟を立て直した。いかつく喉を咳払いする。

ふと目の端に霞がうつり、ぎょっとして振り向くと向のことはない、排水溝から昇る湯気だつた。こんな町中には滅多に霞は降りず、

見かける時刻に私は起きていない。

いつもの公園に足を向ける。月に二、三度でいいといわれたが、気が向けば一緒に昼食をとる仲になつた。

一ソクラプは解約こそしていらないものの、行く機会はない。

季節屋を訪れる習慣すら、いや季節屋 자체がなくなつてしまつた。それは違うか。霞初月支店が無くなつてしまつただけで、季節屋はある。支店名を変えてはいたが。そこには男も娘もいなかつた。露と消えたか、霞となつたか。店のものに尋ねても行方ははぐらかされ、しきりと購つことを勧めてくるので閉口して訪れる気にならないのである。

そういえばあの店のものたちは、全くと言つていいほど商売らしい商売をしてこなかつた。商品も勧められず、案内もうけない。行く度になにかしらもてなしてもらつたのに売りつけられることはなかつた。……霞草は別として。

霞初月の思い出は紙切れ一枚。私の吐いた霞で染めて貰い、とりあえず財布に入れてある。

あれほどに、語ることも思い出すこともしたくないほど霞吐きは苦しかつたのだが、色付きもせず香りも付いていない。霞だから当然だ、と思うが正直少し寂しい。

まあ、いつかまた会えるだろう。

足元にじやれ付く猫は、一月で随分と大きくなつた。春には嫁でも婿でも見つけに行くだろう。

一月が終わつたら次の一月まで十一ヶ月も待たなくてはならないだろう。

限りある一生といつもののはなかなかに良いものらしいですよ。

私の一生には限りがあるが、十一ヶ月を待つぐらいは、まあ、出来るのではないかと考えている。それまでにあの商売下手な店主が店を潰してなければの話だが。

じゃれつく猫はいつの間にか姿を消していた。食べ物がないとわかればすぐいなくなる、なんて現金な。しかし。

もうひとつ咳払いし、私は歩き出す。まだまだ行かねばならないところがある。風邪などひいていらっしゃるのか。家に帰つたら柚子湯でも飲んでおく。

【】

## 雪消月 〽ー月〽

あたしは雪が嫌いだ。

雪国に生まれたのに、と友人は言つが雪国の人間こそ暖かさを求める、とあたしは思つ。南国出身者は雪山を登るし、北国出身者は海に潜る。

夏の暑さも湿氣も苦手ではないのだから、雪が嫌いであつても文句を言われる筋合はない。

雪の降らない土地に憧れながら結局はこの地に戻ってきた。最近は降雪量が少ないので救いだ。それでも、この季節にはイライラが募る。滑り止めのゴムを張り付けたブーツですらしつかりと踏み込めない。新雪はふかふかと心許なく、根雪はたちが悪い。アイスバーンは言わずもがなだ。あたしはブーツのヒールを突き刺すように歩く。ストールをまき直していると空からちらちらとまた降ってきた。塵を核にした水蒸気の固まり。

あたしは舌打ちして睨み上げる。落ちてくる灰色の結晶。傘をさそうと視線を戻した先にその店はあった。

季節屋雪消月支店。

雪を消してくれる。そう思つたらあたしは店の戸を押していた。

随分と古い店だ、というのが第一印象である。木や漆塗りや和紙張りの茶筒が並んでいる。

お茶屋か。あたしは落胆した。そつだ、雪を消してくれる店など、融雪剤を売る店くらいだろう。

店は暖房が効いておらず、しんとした、水の凍みた匂いがした。あたしはこの匂いが何か分かつた。

これは雪の匂いだ。雪が溶けていく匂いだ。

「こりゃしゃいませ」

店の奥から男が一人出てきた。ぱれぼとの頭に首のつまつたセーター、コードユロイのパンツに綿入りだらうはんてんを着ている。黒縁メガネは今時あるのかといつほどフレームが丸い。変な男。これが第一印象である。

「あのひ、この店つて…」

「季節屋雪消用具支店です。雪消用屋、とも呼ばれています」

ゆきげ、つき。

「こりはお茶屋さん?」

「いっえ、売つているのは春風です」

「…春、風?」

明らかに茶筒だろう、と視線を向ければ男は手近な筒をひとつ取り、中指を折り曲げてノックした。木の筒は乾いた音をたてる。

「お試しになりますか」

渡された茶筒を開けて「いらっしゃい」と促される。あたしは蓋を持ち上げた。さゆぽん、と空氣が鳴つて内蓋が見える。突起をつまみ筒を開けた。

「…わ、」

ふわっと漂つたのは優しい匂いだつた。泥臭く、青臭く、澄んだ、甘い匂い。あたしは知つてゐる。これは、

「春の匂いだわ…」

筒の中は空っぽだつた。ふわっと漂つた匂いはすぐに霧散し、また水の凍みた匂いに変わる。

「春風の筒です。開けるたびに薄れはしますが、ひと月は保ちます」  
「春風の、茶筒。これはお香かポプリなの？」  
「香でもポプリでもアロマオイルでもありません。春風をすくつて来て茶筒に詰めたのです」

春風を、すくつて、来て。  
春風をすくつの？

「風の吹き溜まりがあるように、春風にも吹き溜まりがあります。冬の間はそこに溜まつていることが多いので、一足早くすくいに行くのです。茶筒はその、父が茶筒の卸をしていましたこともありますが、…茶筒に入れた春風はより柔らかくなれるんですよ

蓋を戻して筒を返す。男は棚に戻すにはんてんの袖に入れた。春風を詰め直すのだと呟つ。

「…」の茶筒に春風が詰まつてゐるといつわけね  
「そうです」

「開けた春風はどうなるの」

「しばらくは辺りを漂つてから、南へ向かって集まります。春一番に合流するよ」

夢のある話だ。あたしは面白くなつた。夢が嫌いなあたしは春が大好きだ。春一番のあの吹き飛ばされる感じが特に好きだつた。髪を乱されても怒る気にはならない。あの春一番に合流する。

「これ、 いただくな」

手のひらにあたまる、千代柄の和紙を張られた茶筒を貰つた。

公園のベンチに座り、貰つたばかりの包みを開く。かぽん、ヒアルミで出来た筒を開けた。ふわっと春風が出て来る。春風はしばらくあたしの周りに止まり、不意に霧散して消えた。土の匂い、水の匂い、日溜まりの匂い、緑の匂い。目を閉じるとさまざまな光景が浮かぶ。蓋を閉め、また開ける。あたしの好きな春が少しだけ来る。春が来る。

北風が吹き、あたしは目を開けた。道路から搔き出された雪が視界にはいり溜め息をつく。

まだ冬なのよね。

寒気を感じ、立ち上がる。風邪をひいてしまう。ストールをまき直しながらふと、足元に視線を落とす。あ。

足元の雪が小さく円形に溶けていた。その中で少し色を変えた葉が眠っている。ギザギザの緑の葉。タンポポ。

春風は南へ行つた。いつか吹き溜まりにいる風とともに、冬を押し上げるために吹き付ける。縁を田覚めさせる。布団をはがし春を告げる。

そうか、雪は大地の布団なのね。

眠りを妨げてしまつたことに気づいたあたしは、近くの雪をすべりかけた。雪は手の熱で溶けて滴になる。鼻先にかざすと、水の匂いがする。

やつぱり、雪より水のほうが好き。

早く春になりますよつよ。あたしはそんな願いを込めて中指で春風の茶筒を叩いた。

柔らかな音が響いた。春の足音になるのかもしれない。

【】

雨月屋を任せられたため何を売ろうか考えていたが、思い付いたのが「傘」だった。

前任者が扱っていた売れ筋の雨珠は在庫が少なくなっていたから、雨珠を自分で作らないとならないのだが、僕が雨珠の作り方を引き継ぐ前に前任者はどこかへ旅立ってしまったのだ。

雨月屋の開店時期はすぐそこまで迫っていて、新たに田玉商品を探すことに決めた。

雨、雨、と飴玉を転がしながら考えていたが、結局思い付いたのが傘だった。傘ならばあらゆる年代にうけるだろうから、失敗する可能性も少ない、…だろう。

流石の僕でも着任早々赤字になるのは好ましくない。

さて。

その傘である。

どのような傘にしようか。

手始めに忘れ物防止でぴったり体から離れない傘を作つてみる。

なるほど、邪魔だ、あまりにも邪魔である。

取つ手を握つたら離れないようにしても、背中に張り付けても、滴

が垂れるのが苛立ちを助長する。

差しつぱなしで追いかけてくるタイプも狭いところにつつかえて駄目だ。

ならば小さく小さく折り畳める傘はどうだらう、と畳んで畳んでポケットサイズにまでなつたが、急な雨では開くのに手間がかかる上、畳めるように骨が蛇腹に折れるよう作つたので、弱い風でもおちよこになつてしまい、使いものにならない。

いつそのこと、町全体を覆つてしまつたひだりだらう。

しかしこれは町から苦情がきた。

雨が降らないと町がからつからに乾いてしまう。

傘に覆われない町外れからは少々の雨でも滝のようだと怒られた。

ふむ。

考えに詰まつた僕は雨の口に傘を差し町を歩いてみた。

よい考えが浮かぶかもしれないと思い。

季節外れの町並みは開いている店は少ない。

僕のような新任店主が引退した『隠居』もしくは季節屋を経営していない住人たちしかいないから、とてもおつとつとしている。雨の日は尚更だ。

僕の傘はアメジスト、紫水晶から切り出した骨と軸に紅薔薇で織つた布を貼り付けたもので、雨を弾く度に薔薇の香りがする。

この傘は前任の店主に就任祝いとして貰つた。

なんて傘なんだ、と思つた。

水晶で出来てゐるために傘は開きっぱなしで置むことが出来ない。そのため傘は店の隅で置物になつてゐた。派手なので田の端にすぐに入る。

新商品が傘しか浮かばなかつたのはこのせいだらう。

しかしこの傘を商品にしたとして、売れるだらうか？ 雨除けという傘の機能はあるが、実用的ではない。

そつか。

僕は思い付いた。

傘が実用的である必要はないのだ。

傘は雨除け出来れば傘なのだ。

それでは、雨除け出来ない傘は？

季節屋雨舟支店、新装開店致しました。

ええ、店主を引き継ぎまして。

もちろん雨珠もありますが、新商品を入荷したので見て頂きたくて。

こちひりです。

そつ、傘です。

何の変哲もない、トザインも普通の傘です。

ですけどね、この傘、実は雨除けにならないんです。

そんなものが傘として役立つかどうって？

まあ、試して頂けませんか。

まずこちひり、この細い軸の傘、これは霧雨傘です。  
差してご覧なさい。

ああ、先に雨合羽を着て下さいね。それと長靴も。

…気持のよい霧雨でしょう。

水温も調整出来ますよ、ええ、赤いものが夏の雨、青いものが冬の  
雨です。

軸の太いものも試してみますか。

この一番太い傘ですか、すゞいですよ、しつかり踏ん張つて下さい。

…洪水になりそうなくらいの豪雨だつたでしょ。

合羽の中までびしょびしょですか、これは失礼しました。

この傘が何の役に立つかですって？ いえ、ただ雨が降る傘です。  
それ以外は。

…売れませんかね。

ですけどほら、見て下さい。予想外の產物なんですが、ほら、虹が出るんですよ。それも必ず。虹の見える傘。売れないのでしょうか。

家に居られなくて居てられなくて街へ出た。目的もなくウインドウショッピングをしていたら、ひいに貰つたものにそつくりな卵を見つけた。

復活祭は過ぎたのに売れ残つたらしきたくさんのイースター エッグたち。

季節屋本舗得鳥羽月支店、長つたらしい名前の店に入つたのはイースター エッグに惹かれたからだ。イースター エッグに惹かれたのはひいが卵をくれたからだ。ひいがくれた卵の一件を店の人と話すことになつたのは、まぎれもなく私がひいにフられたばかりだからだ。フられたのか何なのか、未だによく分かつてはいないんだけれども、とにかく私はひいと別れて、ひとりになつたばかりだつた。

店にいた店員さんはひとりで、暇だつたのかよつぽどあぶなかつたのか、入るなり籠かごにならぶイースター エッグの前から動かなくなつてしまつた客、つまり私にお茶をすすめてくれた。

温かいカップを手にしたら鼻奥がつんとして、視界がゆがんだかと思つたら涙腺がぶつこわれてそのままわんわん泣いていた。本当にわんわんと声をあげて、だ。ようやくしゃくりあげられるようになつたときは喉はがらがらだつたし顔なんて鏡を見なくともわかる大変よろしくない状態で、店員さんが差し出してくれた箱ティッシュとタオルを持つてお手洗いを借りた。

ああ、お化粧が落ちちゃつた、とティッシュで顔をぬぐいながら思つたけどよく考えみたらお化粧なんしてきてはいなかつた。服だつて部屋着に春コートを引っ掛けただけだし、外出するときはおろす髪もうしろでくくつたままで、どれだけ私は混乱していたんだかと思つた。

しかもその混乱と困惑は現在進行形なのである。この状況でどうやらつて店に戻つてなぜ突然泣き出したかを説明すればいいのだ。優しげな店員さんは理由を問わないかもしれないけれども、私は一緒に持つてきていたさつき貰つたカップのお茶をじっくりと飲んだ。ぬるいほうじ茶がおいしい。そのまま一気に飲み干し、鏡の中のすっぴんの私を睨むと赤い目の私が睨み返してきた。ぐちゃぐちゃでぼろぼろ、お化粧もしていないからと水で顔を洗つてタオルで拭いて、バッグの中を確認したけれども化粧ポーチは入つてなかつたのでせめて髪をほどいて手櫛でとかし、コートの前を全部留めたらなんとか見られる姿になつた。

深呼吸を何回かしてから、空のカップとタオルを持つてお店に戻つた。箱「ティッシュ使い切つちゃいましたごめんなさい」と頭を下げる店員さんは座るようにすすめてくれた。一度ふつり切れた現実感はまだ戻つてこなく、なるようになつてしまえ、となげやりな意識とどうにかこうにか取り繕えないか、という往生際の悪い自分が鬪つているけれども、すすめられるままに座つた。

肉厚の湯のみにほうじ茶を淹れてもう一つ。熱々を含むとまた涙腺が弛んできそうで、さつきバッグを漁つたときに見つけた自分のハンカチを出してぎゅっと握りしめた。もう一口飲むとすとん、と落ち着いたのがわかつた。

ハンカチで目元をぬぐつて、正面に座つた店員さんにもう一度謝る。店員さんはいいんですよ、と笑つてくれた。

手を出して、と言われ広げた手のひらに銀紙でくるまれた丸いものを置かれた。においてわかる、小さな卵形のチョコレートだ。甘いものは気分を落ち着けますよ、といつので頂くことにする。ミルクをたっぷり使つた甘い甘いチョコレートだつた。

鼻に抜ける力カオが魔法のように口を開かせていた。迷惑ついでに話を聞いてもらえませんか、伺つと店員さんは暇ですかいいですよ、と言つてくれた。

さつき見てたの、イースターエッグです。私、彼にイースターエッグを貰つたんです。1ヶ月くらい前かな、ウサにあげるよつて、誕生日でも記念日でもないのに突然。ああ、名字から私のことを同級生はウサつて呼んでました。ひいも元同級生で、と話し始めた私に店員さんは黙つて頷いた。

ひいとは長い付き合いになるんで、漠然と結婚するのかもとは思つてたんです。何回かケンカして、別れる別れないとか実際別れたりもしましたけど、結局仲直りして、私もひいもい年齢で具体的なはなしさなかつたけどそつなるんじやないのかなあ、と。ネックだつたのは私に子どもが出来ないかもつていうことで、ひいはそのことについて何も言いませんでした。

私、子どもが出来ないんです。高校の頃子宮に腫瘍が見つかって、可能性がないわけじやないとお医者さんは言つてましたけど、でも可能性はずいぶんと低いんだろうと思います。ひいは、彼は高校の元同級生で、私は入院で一年遅れたので卒業は先輩になるんですけど、腫瘍が見つかる前から付き合つてたので子どもが出来ないことも知つてました。

復活祭の前の日でした。復活祭なんていつも知らないんですけどイースターエッグを貰つたばかりですし、ちょっと気にしてました。何か意味があるのかな、みたいな期待もあつて、だからひいが話があるつて、会おうつて連絡してくれたときも新しい服買つて、お化粧も念入りにして行つたんです。

ひいは、彼は結婚することにした、つて言いました。私は最初嬉しくてびっくりして、でもあれ、つて疑問に感じました。結婚する、つてプロポーズかと思つたんだけれどもニュアンスも、何よりひいの表情がプロポーズつて感じじやなかつたんです。

子どもが出来たんだ、つてひいは言いました。私は動搖してテープ

ルのコップを倒してしまったけど、ウェイターさんたちは私たちの空気を読んだのか誰も近づいてきませんでした。

思い出に一晩付き合つて欲しい、と彼女は頼んだそうです。ひいが何を考えたのかわからないし、知つても理解できないけれども、とにかくふたりはそういう関係になつて、彼女に子どもが出来た、そういうことです。

いろいろ考えたんだけど、とひいはつぶやきました。いろいろ、は具体的に言われなかつたけど、言われなくともわかります。ひいひとりで、彼女とふたりで、もしかしたらふたりの家族とも話し合つたんだと思います。考えた結果で、結婚する、ときっぱりとひいは私に言いました。

私と、ではなく、彼女と。

それからのことはよく覚えてないんですけど、目の前にはひいがいなくなつていて年配のウェイターさんが倒れたコップを直して、タオルを差し出してくれていました。今日のあなたみたいに。その時ようやくスカートが濡れていることに気がついて、私は慌てて店を出ました。

そのまま家に帰つてテレビをつけて音量をあげてわけもわからず泣きました。いつの間にか日付が変わつて日曜のニュースをやつてきて、復活祭の話題をやつてました。テレビの脇にはひいがくれたイースターホツグがあつて、それでも毎日が過ぎていつて。

今日も、それが目に入つたら家にも居れなくなつて、こんな状態で街に出たんです。

そうしたらこのお店にイースターエッグがありました。びっくりした、ひいがくれたイースターエッグにそつくりだつたから。

話していると遠巻きながら現実感が戻つてくるようだつた。初めて入つたお店で泣き出して迷惑かけて話まで聞いてもらつていて、あの夜お店でタオルまで貸してくれたウェイターさんにお礼も言つていないこと、そもそも、お会計はひいがしていつてくれたのだろうか。一方的にひいに別れを告げられるだけで私は何も言い返せていない。

：ああ、やっぱり私はひいにフられたのだ。  
フられて置いてかれたんだ。

すとん、と答えが胸に落ちた。そうしたらなんだか、笑えてきた。ばかみたい、ばかだわ、って思つたらまた涙がでてきて慌ててハンカチでぬぐつた。もう田は真つ赤でしばらくは腫れぼつたくなるだろい。

店員さんがお茶をかえてくれて、銀紙のチョコレートをもうひとつ、手のひらに乗せてくれた。小さな卵形のチョコレート、これもイースターエッグなんです、と店員さんは教えてくれた。

春分の日に産まれた卵は復活祭の朝に鳥になるんですけどね、孵らない卵もある。孵らなかつた卵は次の満月の夜に人間になるんです。

そんな話は聞いたことがないけど、どこかの国の伝承だらうか。店員さんは続けた。

復活祭の朝に孵つた鳥は不死だと謂われているから、欲しがる人がたくさんいます。でも彼らは鳥なので捕らわれたりはしない。問題なのは孵らなかつた卵です。

次の満月の夜に彼らはヒトになりますが、羽の生えたヒトになる。

店員さんは立ち上がり、イースター エッグの入った籠かごを持つてきました。

羽の生えたヒトを欲しがる人は不死の鳥を欲しがる人と同じほどいる。だからイースター エッグに紛れさせて次の満月まで過ぎ越すんです。

そしてぽん、とイースター エッグの籠かごのとなりにウサギのぬいぐるみを置いた。

イースターバニーといいます。復活祭の朝にイースター エッグを運ぶ役目がありますが、実は孵らなかつた卵を隠す役目もあります。彼らが持ち帰つてきた卵を私たちがイースター エッグに飾り付けて、過ぎ越しの隠れ家を探すことになります。

このバニーは彼らを模したぬいぐるみですけど、と店員さんは言った。

じゃあこのイースターエッグのなかに羽の生えたヒトになる卵があるってことですか、と私は訊いた。店員さんは、さあ、売れてしまつた卵もありますからねえ、と曖昧に笑う。イエスともノーともとれる笑みだつた。

ひいが何故イースターエッグをくれたのか、それはわからない。訊いてみれば教えてくれるかもしれないけれど連絡をとる勇気は、ない。でもなんとなく。

ひいは、彼はイースターバニーのことをどこかで聞きかじったのかも。バニーと私のウサをかけて、イースターエッグをくれただけのかもしませんね。

手を伸ばしぬいぐるみのおなかを触った。ふつくり膨れたおなかは子どもがいてもおかしくはない。

ひいには深い意味はないプレゼントで別れ話ともたまたま復活祭にかぶつただけなんだろう。…でも、だけれどもちょっとだけ、ほんのちょっとぴりまだ期待があるのも確かだ。ひいがくれたイースターエッグにはなにか意味があつて、復活祭に重要な役目があつた。例えばプロポーズとか。

それを考えたら、もらつたチョコレートを手で転がしながら、チョコエッグつてお菓子あるじゃないですか、店員さんにと訊いていた。チョコエッグといえば大人買いですよね、私ちょっと憧れてたんですね、と言つと店員さんもニヤリとして、わたしもですと同意してくれた。チョコエッグはお菓子というより玩具で、玩具というよりコレクションだ。箱買いする大人たちにちょっと呆れながらも憧れはあつた。

大人買い、しちゃおうかな。

籠かごのイースターエッグは1ダース半ほど、バッグには財布はしつかり入つていたから大丈夫だ。何よりさんざん迷惑かけたお礼を兼ねてなにかしたかつた。

羽の生えたヒトの伝承を信じるわけじゃないけど気にはなる。きっと売れ残りのイースターエッグを復活祭が過ぎても販売するための作り話なんだろうけど、せつかくイースターバニーが隠し持つてきたのだから次の満月までの過ぎ越しの隠れ家くらいにはなれる。同じウサとしてはそれくらい、してもいい。

お買い上げありがとうございますと店員さんは頭を下げた。籠かご

をオマケでもらって、イースターバーとともに見送られた。バーニーたちによろしく、と手を振った私はお店に入る前と状況はなにひとつ変わってないのだけれど、なぜだかすつきりしていた。

家に帰つてシャワーを浴びて、お化粧をして服を着替えたあとの夜のお店に行こう。ウェイターさんにお礼を言つて食べ損ねた料理を食べよう。…出来たら、の話だけれども、それが出来たらひいに文句のひとつも言える気がする。

イースターエッグは生命の象徴ともされていますから、彼はあなたに何かを伝えたかったのかもしれませんよ。

最後にそう教えてくれた店員さんの言葉をつぶやいてみる。生命の象徴、でも彼は私の元からは去つてしまつた。私と彼のところで孵らなかつた卵も羽の生えたヒトになるだろうか。

涙がにじんで、籐かごを抱きしめた。孵らなかつた生命をたくさんかかえて私は家に帰る。ばいばい、ひい。でもせめて次の満月までは彼のことを想つていようと思った。それくらいは許されるだろうから。

【ア】を許されるだらうから。

【】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7914d/>

---

季節屋

2010年10月19日20時11分発行